

夫婦で冒険者！

奥さんは魔女。
旦那さんは寝取られマソ。

第四章 新婚冒険者誕生！

純白のローブは引き裂かれ
新妻の肉体はならず者達に
奪われる！



八ヶ岳昌司

主な登場人物

ミユリ・クラウチ（旧姓 ミユリ・オクヤマ）

炎を使った攻撃魔法を得意とする黒魔法の使い手。特待生として二年早く魔法学部への入学を許され、師匠のクジマの下で魔法の英才教育を受けた。誰もが振り返る美少女だが、その心には常に幼馴染のタチバナが居る。本編では魔導士課程の院生としてスタートし、卒業後はタチバナと共に冒険者となる。

タチバナ・クラウチ

ミユリの幼馴染であり恋人。小太りで丸い眼鏡をかけた冴えない風貌をしている。白魔法の使い手であり、防御魔法と回復魔法のエキスパート。癒し系のタチバナと呼ばれ、常に周囲を和ませている。本編ではついにミユリと結ばれ夫婦となる。

クジマ・ゾリユウジ

ミユリの魔法の師匠。頑固で偏屈な性格の老教授。武闘派で実戦を重んじ、魔法の道を究めるためには弟子の命を危険に晒すことも厭わない。都を訪れた際に酒に酔い、弟子のミユリとうっかり肉体関係になってしまった。

リユウト・キルエン

騎士学部の学生で、悪友四人組のリーダー。学園内に何人もガールフレンドを持つプレイボーイ。モンスターとの戦闘の後に魔力の尽きたミユリを襲い、その処女を奪った。

トモカ・サキザキ

ムーンヴィルの町で冒険者ギルドの事務を取り仕切る女性。頭の回転が早く、見るからに有能。仕事にあたっては冷静沈着を旨としているが、私生活では夫（未入籍）にデレデレらしい。

シスター・クローバー

都にある女神の神殿にて神官長を務める年老いた女性。ミユリの出生の秘密を知っており、神殿を訪れたミユリに生命移転の儀式を施した。

王立学園魔法学部。

そのキャンパスの外れ、林の中に建てられた試練の館。

その館の中、最奥に位置する部屋の中に作られた異次元空間。

その広大な亜空間の中、制服姿のミュリは、両手を前方にかざして静止していた。

たった今、自ら放った魔法による高熱で、ブレザーは燃えて破れ、スカートの裾も膝の上まで焼け焦げてしまっている。

魔導士課程の院生となったミュリは、規則の上ではもう学園服を着なくともよいのだが、炎の魔法の使い手である彼女は、研究と実践の中で常に衣服をボロボロにしてしまう。安価で、かついくらでも替えが利くからという理由で、ミュリは今でもこの制服を愛用していた。これなら毎日どの服を着ていくか考える必要もない。衣服のことで悩むくらいなら、その時間と思考力を魔術の研究に充てたい。この一年間、ミュリはそれほどまでに、魔術の研究に没頭し、修行に打ち込んできた。

ミュリが手をかざした先、広大な異次元空間である部屋の中心には、体長が数メートルはあるかという巨大なドラゴンが立ち尽くしていた。ミュリの放った巨大な炎が収まった後、

そのドラゴンは身動きひとつしない。その全身は焼けこげ、巨体のあちこちから煙が立ち上っている。

部屋の隅で戦いを見守っていた師匠のクジマが両手の指を組み合わせ、魔術によつて出来た四角形のスクリーン上で両者の状況を確認すると、300以上あるはずのファイヤードラゴンのヒットポイントはゼロを示している。対してミユリは61。戦闘開始時と変わらぬ数値のままである。ミユリは無傷のまま、この強大なモンスターであるファイヤードラゴンに勝利したのだ。

「見事だ。想定通りだな」

黒魔術の師匠であるクジマは、試練を乗り越えた弟子を祝福すべく声をかけた。

公式の試練の際に、師匠が戦いの現場に立ち会うのは本来は禁じられている。だがクジマは魔術委員会に例外を認めさせていた。クジマがこの試練の場に立ち会うのはミユリを守るためではない。万が一ミユリが暴走した際に、彼女を止めるためである。

一年前、シルバー・グリフォンとの戦いの際に、魔力計が異常な数値を記録したことを、クジマは重く見ていた。ミユリは戦いに勝利したものの、その間の記憶が残っていないのだ。

「想定通りではありませんでした、先生。私は初手のカテドラル・フレイムで、もう少しダメージを与えられると思っていました」

師匠の方を振り向いて返答したミユリの言葉に、クジマは自嘲気味にフンと鼻を鳴らした。カテドラル・フレイムは若き日にクジマが生み出したオリジナルの黒魔法だ。その魔法にケチを付けられると、まるで自分自身に苦情を言われたような気になる。

「結果的にあのファイヤードラゴンにブレスによる攻撃を許し、自衛のためにエクセシブ・ファイヤーを放たざるを得ませんでした」

「敢えて先手を取らせ、ドラゴンの放った魔法をカテドラルで完全に弾き返した上で、相手のブレスに正面から炎の魔法で挑み、たったの2ターンで勝利。これは完璧な勝利ではないのか？」

「はい。でも学生の身である私には実戦の場は貴重です。可能であればもう1ターン、ブレスの攻撃を封じた上で、私はあのドラゴン相手に、別の魔法を試してみたかったです」

クジマは内心舌を巻いた。

ファイヤー・ドラゴンは熟練した冒険者のパーティーでも苦戦する強大なモンスターだ。そもそもドラゴンに勝てる人間など、ごくごく少数の選ばれた者しかいない。そのドラゴンでさえも、ミユリにとつては魔法の実地検証の相手でしかないというのか。

どうやら我が愛弟子は、この一年の間に強くなり過ぎたらしい。

「でもこれで、カテドラル・フレイムの実戦での効果がよくわかりました。私、この魔法が好きです。だからこそ、より一層の攻撃力をそこに求めたいんです」

「ふっ……ふっ、ふっ……」

クジマの口元が弛み、押し殺そうとしても自然と笑みが漏れる。

ミユリの指摘の通り、カテドラル・フレイムは炎が一斉に花開く派手な見た目のわりには攻撃力に欠ける魔法である。

（あれは本当は、仲間を守るために編み出したのだ……）

防御のために攻撃力を犠牲にするというのは、黒魔術の攻撃性を第一と考えるクジマにとつ

ては本意ではない。

あの魔法は自分の心の弱さが生み出したもの……

まるでステンドグラスのような模様を描くその華やかな炎の花は、魔術師としてのクジマの名声を大いに高めたが、クジマ自身は、それを自らの若気の至りが生み出した未熟な魔法だと考えていた。

だがひよつとするとこの弟子は、他に使う者の無かったこの魔法を、更に完璧なものへと高めることが出来るかもしれぬ。

「よかろう。何ひとつ文句を付けられるところはない。卒業試験、合格だ」

頷きながらそう言った師匠の言葉に、ミユリは嬉しそうにつこりと微笑む。その笑顔は年相応の娘にふさわしい可愛らしいものだ。たつた今、人智を越えた強力な魔法で巨大なモンスターを葬ったばかりだとは、とても思えない。

その笑顔の中に、クジマは今更ながら、愛弟子であるミユリの中に、女という生き物の怖さを感じた。

ほんの一昨日の夜にも、ミユリは黒魔術館の教授室のソファの上、全裸になってクジマにまたがり、腰を振っていたのだから。

またクジマは、この半年の間、ミユリが騎士学部の人か男子学生たちと関係していたことも知っている。

そんなミユリが、このような可愛らしくあどけない笑顔を見せたかと思えば、あのような巨大なモンスターを打ち倒したりもする。

(黒魔法とは……あるいは女の身なればこそ、究めることが出来るものなのか……?)

黒魔法の極意は攻撃性だ。魔法がその使い手の心の現れであるとすれば、内に秘めた攻撃性、そして本性の残酷さこそが、その威力を決める。

クジマは戦場に立っていた若き頃より、残酷であろうと努力してきた。だが、結局自分は真に残酷にはなれなかった。

それは、ひよつとすれば自分が男だったからかもしれぬ。

『試練の間』から出ると、ミユリは嬉しそうに回廊を小走りに、出口の方へと向かっていく。

「儂は魔力計の記録を取っていく。先に戻っておれ」

師匠の言葉はもうミユリの耳には入らないようだ。彼女は返事をすることもなく、『試練の館』の出口の扉へと走っていく。その扉の向こうには『愛しい男』が居るのだろう。あのボンクラ……白魔法を専攻する学部生のタチバナ・クラウチは、試練の間中、館の外で待ち続けていたに違いない。

それほどまでに想い合い、自分のことを愛してくれる男が居ながら、なぜミユリは自分も含めた他の男達と関係し、抱かれたりするの……。

クジマにはそこが理解できない。

魔力計の記録用紙をバインダーに挟み、扉の外へ出ると、案の定そこではミユリとタチバナが抱き合っている。

ミユリの無事と、試験の合格を喜び合い、仲睦まじそうにささやき合っている二人の姿は本来ならば微笑ましいはずのものだ。

だがそこに、クジマはミユリの、そして男と女の関係の残酷さを思った。

女というのは残酷な生き物だ。

クジマは心底そう思う。

確かに男には残酷な行為は出来る。人を殺すだけならば男の方が得意かもしれぬ。しかし女は、存在そのものが残酷なのだ。

「ミュちゃん、おめでとう。ドラゴンを倒したんだね？」

「そうよ、タツちゃん。私やったわ！ ねえ、褒めて。いっぱい褒めて」

幼馴染のタチバナに話しかけるミュリの様子は、先程までクジマに見せていた冷静沈着な魔術師のそれではない。

子供の折から続く関係性ということか……

タチバナの前でだけ見せるその無邪気な少女のような顔が、ミュリの素顔であり、またタチバナに対する愛の証なのだということが、クジマにも見て取れた。

「見て、タツちゃん。私、ひとつもダメージを受けなかったのよ？」

「すごいや！ ドラゴン相手にノーダメージだなんて……もう僕の防御魔法なんて必要なかったね？」

「ううん、タツちゃんが守ってくれるから、私、戦えたの」

恋人のタチバナが投げかける惜しみない賞賛の言葉を浴びながら、ミユリの顔は喜びでいっぱい輝いている。

クジマは試練にあたり、タチバナがミユリにオリジナルの自動防御魔法『リアクティブ・シールド』をかけることを黙認していた。

この一年で成長し、強大なモンスターとも互角に渡り合えるようになったミユリにとっては、防御魔法の有無は小さな要素でしかない。だがそれによってミユリの精神が安定するのであれば、それに越した事は無いとクジマは考えた。クジマはミユリを追い詰めることによって、彼女の中にある得体の知れない何かが発現することを回避したかったのである。

「これからもそう。タツちゃんと二人なら、私、どんな強い敵とでも戦えるわ……！」

離れていてもタチバナと共に二人で戦うのが、ミュリのスタイルなのだ。これで三度目となった試練という名の実戦を経て、クジマもその事を認めざるを得なかった。そして、その方が周囲にとつても安全であろう。彼女の精神が安定している間は、あの魔力の暴走はおそらく起こらない。

「だから、これからも傍にいて。私と一緒に戦って」

ミュリがタチバナの手を握り、二人は潤んだ目で見つめ合う。

「うん」

タチバナが小さく頷き、二人の顔が近づいていく。

微笑ましい口づけを交わす若い二人を尻目に、クジマはその場を後にした。予想を越えた弟子の成長には驚嘆したが、タチバナに対しては、憐憫の情しか湧いてこない。

(哀れな男よ……)

この男にとっては、ミユリは幼馴染という名の牢獄に他ならない。だがタチバナが自ら進んでその中に留まる以上、他人であるクジマに出来ることは何も無かった。

「じゃあ、もう遅いから、私帰るね。また……また明日……」

長いキスの後、ミユリはそう言うと、上目遣いにタチバナを見つめ、もう一度、タチバナの首筋にちゅつと音を立てて口づけをした。

ぱたぱたという足音と共にミユリが去った後、『試練の館』の前には、どぎまぎとした様子で立ち尽くすタチバナだけが残された。

やがて館を囲む林の中から、冷たい夜風がさらさらと吹き付け、惚けた顔で立っていたタチバナをはつと正気に戻す。

ちょうど一年前の進級試験の際、ミユリはこの林の中で、リュウトを始めとする四人の男子学生に襲われ、処女を失ったのだ。

その後、その四人は退学となったが、ミユリにとっても、タチバナにとっても、それは決して忘れることのできない出来事だ。

四人の男達によって引き裂かれた二人の心の傷は、未だ癒えることなく、ぽっかりと開いた傷口からは絶えず膿が流れ出していた。

たとえ治癒魔法を得意とするタチバナでも、心の傷だけは癒すことが出来ない。

今この瞬間も、その傷口からは膿が流れ続け、自分たちにそれを止める術が無いことを、タチバナはこの時、ひんやりとした夜風の中で思い知っていた。

それから三時間後。

そろそろ時刻が深夜を回ろうかという頃、タチバナは狭く暗い空間の中で、じつと息をひそめていた。

ここはキャンパスの中では、魔法学部と反対側にある第三闘技場。ここに来るのは初めてではない。

タチバナがこの場所に初めて来たのは、これも一年近く前のこと。あの時、タチバナは深夜にキャンパスの中を歩いていくミユリの姿を偶然見かけ、その後を追ってこの場所へ来た。

そしてそこで、タチバナはミユリが四人の男達との決闘に敗れ、いのように弄ばれ、好き放題に犯される姿を見てしまった。激しい雷雨の中、タチバナはミユリの身体が憎い男達に奪われる様子を、嫌というほどに見せつけられたのだ。

身も心も陥落したミユリはそれ以来男達に抵抗できなくなり、言いなりとなって、遂には四人のリーダー格であったリユウトによって妊娠させられてしまった。

憎い男の子供を身ももったミユリは、都にある『女神の神殿』で儀式を受け、生命移転の秘法によって胎児の命を奪うことなく事無きを得、魔法の修行を続けられることとなったが、その心の傷が癒えてはいないことを、やがてタチバナは知ることとなった。

数ヶ月が経ち、魔導士課程の院生となったミユリが、あの日と同じように夜のキャンパスを歩いているのを、タチバナは見かけた。タチバナは夜になると、窓の外を眺めながら考え事をする癖があつたから、女子寮から出て、男子寮の前にあるキャンパスの反対側へと続く道を歩

いていくミユリの姿を見つけるのは、いわば必然と言えた。

薄暗い街灯に照らされた石畳の道を、キャンパスの反対側に向かって歩いていくミユリの後を追いつながら、タチバナは自分の胸の動悸が激しくなっていくのを感じざるを得なかった。

なぜ、ミユリはまたこんなことをしているのか。自分の知らないところで、他学部の人と関係しているのか。あるいはまた、誰かに弱みを握られ、脅されているんじゃないだろうか。タチバナの脳裡には、あの一年前の雷雨の夜に見た、四人の男達に弄ばれ、犯され続ける裸のミユリの姿が甦っていた。

果たしてミユリはあの夜と同じように、騎士学部の施設である第三闘技場へと入っていく。タチバナもまた、あの夜にそうしたように、ミユリが魔法によって難なく解錠した入口の扉の隙間から、中の様子を覗き込んだ。

そしてそこで見たものは、闘技場の土俵の上、横たわって自慰行為に耽るミユリの姿だった。夜の闘技場の中、ひとつだけ点灯したスポットライトのような照明の下、ミユリは制服のまま、土俵の上に横たわり、右手で自分の股間を、そして左手で自分の胸をまさぐっていた。

スカートをまくり上げ、男達にそうされたように、白いパンツの上から股間の部分を荒々しくこするようにまさぐり、そして、やはり男達の手でそうされたように、パンツをずり降ろし、白いパンツは膝のところできやくしやくしやになって止まっている。

ミユリの左手はブレザーの、そしてブラウスのボタンを丁寧にとつひとつ外していき、ブラウスの胸元が開くと、ブラジャーを押し上げてその豊かな乳房を自分の左手で揉みしだいた。白いブラウスと、白いブラジャーの下から、それよりもさらに白いミユリの乳房がのぞき、その先端にはピンク色をした小さな乳首がちよこんと付いている。その乳房を、ゆつくりとした動きで、自らの手で揉みながら、ミユリが何を思っているのかはタチバナにはわからない。けれども、タチバナはそのミユリの姿から目を離すことが出来なかった。

(き、きれいだ……)

やがてミユリの息遣いが荒くなり、切ない吐息と共に、聞こえるか聞こえないかという程のか細い声が漏れ、それを聞いたタチバナはようやくミユリの気持ちを理解した。

「あつ……やめて……やめて……ああつ……！」

自慰行為に耽りながら、ミユリは思い出していたのだ。リュウトら四人の男に犯されたあの夜の出来事を。

ミユリはあの四人に弄ばれた事実を何度も反芻し、その記憶をここで繰り返し追体験しているのだ。

そして、それによって自らも快感を感じ、彼らに弄ばれたその心の傷を、その痛みを少しでも和らげようともがいているのだ。

「やめて……やめて……リュウトくん……カナグリくん……お願い……！」

自分を好き放題に犯していったあの四人の名を呼びながら、ミユリは自分の股間を指でいじり回し、切ない吐息を漏らし続ける。その息遣いが荒くなり、まるで絞るように胸を揉みしだく手の動きが大きくなっていくと、それを見つめるタチバナもズボンを降ろし、自分の股間のモノを握りしめずにはいられなかった。

ミユリ同様オナニーに耽りながら、タチバナは涙が止まらない。

あの四人は退学となって放逐され、形の上では事件は解決したものの、ミユリとタチバナの

間ではそれは決して終わってはいない。自分たちの関係は二度と元通りにはならない。そのことをミユリもタチバナも、自らの下半身を通じて、はっきりと思い知っていたのだった。

「ん……んっ……」

やがてミユリが小さく呻き、土俵の上、弓なりになった身体が震えたかと思うと、次の瞬間、恥ずかしがるように身をよじって丸くなる。その右手は股間に添えられたまま、身体を丸くして快感に耐えている。

それを見つめていたタチバナもまた、時を同じくして我慢の限界に達し、覗き込んでいる闘技場の鉄製の扉の上に、オナニーの射精を勢いよく噴射した。

それ以来、タチバナが窓の外に注意を向けるようになると、ミユリは正確に二週間に一度、この秘密の自慰行為を行っていることがわかった。

夜のキャンパスを歩いていくミユリを見つけると、タチバナはその後を尾け、第三闘技場で
のミユリのオナニーを覗き込んで自らも自慰行為に耽った。

ミユリはタチバナが覗いていることはとつくに気付いている。けれども二人は決して声をか

けず、昼間の会話の中でも、この秘密のオナニーについて決して触れることはない。

あの事件以来、二人は抱き合つてキスをするだけで、それ以上の行為には及んでいない。

それは、二人のプラトニックな純愛が引き裂かれたという事実に向き合う勇気がなかったというだけでなく、男達とのセックスを覚えて急激に大人になつていくミユリが、自分の変わらぬアイデンティティをタチバナの中に求めた結果でもあつた。

誰よりも精神的な結び付きの強い幼馴染であり、誰もが羨む恋人同士だつたはずの二人。だが大人の階段を登ろうとする時、二人の下半身のつながりは、不幸にもこのような歪んだ形となつてしまつた。けれどもたとえ歪んではいても、今のミユリとタチバナにとつては、それだけが二人のセックスを結びつける大切な形だつたのだ。

一度寝取られたカップルは、二度と元には戻れない。

特に二人の愛が純粹であればあるほど、その関係は元の形に戻ることには出来ず、寝取られの道を歩み続けることとなる。

まだ若い学生カップルだつたミユリとタチバナも、その例外では無かつた。

ある夜、タチバナがいつものようにミユリを追って第三闘技場へと向かうと、そこに人の気配があった。男だ。ミユリだけではなく、男が闘技場の中に居る。

扉の隙間から覗き込むと、騎士学部と思われる背の高い一人の男とミユリが、土俵の上で向き合って会話している。

男の方は当惑した様子で、ミユリの方がどこか毅然とした態度を保っている。

「勝負して欲しいの……」

鉄製の扉越しに、ミユリがそんな言葉を発したのが聞こえてくる。

「し、勝負って……本気かい？ 俺には君と戦う理由はないよ……」

「本気よ。私、あなたを殺すつもりでやるわ。もしあなたが勝ったら……」

「俺が勝ったら……？」

「私のこと、好きにしていいわ」

その言葉に男が衝撃を受け、ごくりと生唾を飲み込むのがわかる。それは覗き込んでいる夕チバナも同じだった。

その男はハルヤマという名の、騎士学部の学生だった。

学部の最上級生で、学業の成績も実戦の実力もトップクラスの男だ。

リュウトやカナグリたちよりは年下だが、ミユリは一般の生徒よりも二年早く王立学園に入学しているので、学部生とは言ってもミユリより年齢はひとつ上になる。

「ミユリ・オクヤマさん、だったよね……好きにしていって、どういうことかな？」

闘技の構えを取りながらも、育ちの良い騎士学部のエリートらしく、丁寧な言葉遣いを崩さずにハルヤマは問いかけた。

「そのままよ。わかるでしょ、男なら……」

男を馬鹿にしたような冷たい視線を投げかけながら、ミユリは簡潔に答える。

「でも、君には確か、仲の良い彼氏が居たんじゃなかったのかい？」

優等生として周囲からの評判も芳しいハルヤマは、確かめるようにミユリにそう問いかけた。

「関係ないわ。これは戦いよ。勝者が敗者のすべてを奪うのは、当然のことだわ」

「いいんだね、本当に……？」

プレイボーイと言われたリュウトほどではないが、ハルヤマにも学園内に何人かの恋人がいる。将来を有望視された騎士の卵としては当然のことだ。だが学園内でも最高の美女であるミユリ・オクヤマをモノにするチャンスを前に、勇敢な騎士が黙って帰るわけにはいかない。

伝統闘技の低い構えの姿勢をとったハルヤマは、油断なく様子を伺いながら、少しずつミユリとの距離を詰めていく。

自信過剰な騎士学部の子の例外に漏れず、ハルヤマもまさか、自分が女子に負けるとは微塵も思っていない。

土俵の上、距離を詰めたハルヤマがタツクルを繰り出す。

素早い動きながらも、押し倒したミユリに怪我をさせないように加減したタツクルだ。だがミユリは自分の靴にクイックフットの魔法をかけている。

素早く身を翻し、タツクルを逃れると、両手から炎の魔法を繰り出した。

「うわっ!!」

騎士道に邁進する騎士学部では、魔法に対する対処はあまり教えられていない。

ミユリの両手から飛び出した、いくつもの炎の球を目の当たりにしたハルヤマは驚き、慌てふためいて後退する。

だが、いくつもの火球に囲まれながらも、幸いにしてハルヤマは無傷だった。

「よく躲したわね」

ミユリが悔しそうに、冷たい口調で言い放つ。

ハルヤマは気を取り直して再び距離を詰め、タツクルの隙を伺う。伝統闘技には当て身の技もあつたが、女の子を相手に騎士が本気で殴るわけにはいかない。

再びタツクルを仕掛けるが、生身の人間とは思えない素早さで、またもミユリは身を躲す。魔法っていうのはこんな速く動けるのか、ハルヤマがそう思った瞬間、ミユリが右手を上にかざし、そこに白く光る電撃が発生した。

「うわああっ!!」

雷の落ちる音が闘技場に響き、ハルヤマは自分がまたも情けない悲鳴を上げたことにすら気が付いていない。

だがハルヤマは無事だ。立っていたところからほんの1メートルの位置に、電撃によって穴が空き、地面が黒く焼け焦げている。

「運がいいわね、あなた」

ミユリはハルヤマをまつすぐに見つめたまま、冷たく言い捨てる。

ハルヤマはどこか腑に落ちないものを感じたが、戦いの最中に余計なことを気にしている余裕はない。ましてやこんな美少女を目の前にしているのだから、男なら前進あるのみだ。

「今度こそ掴まえてやる」

当て身だ。ハルヤマは思った。この女の子の素早い動きはタツクルでは掴まえない。けれども当て身ならいける。左手のジャブを素早く繰り出せば……それに鳩尾に当てれば、怪我をさせることもない。

ハルヤマは一瞬の隙を突き、足を擦るような動きで瞬間的に前に出ると、素早く左手を繰り出した。

タツクルが来るものと思っていたミユリは反応が遅れ、回避の動作を取るが、追いつがるハルヤマの方が速い。ハルヤマの左の拳がミユリのブレザーの鳩尾のあたりに食い込み、ミユリは信じられないといった表情でハルヤマの顔を見つめ、そして崩れ落ちた。

土俵の上に、スカートをはだけ、髪を振り乱した制服姿のミユリが横たわっている。鳩尾に

食らった一撃の痛みに、ミユリは悶絶し、うつ、うつ、と低い声で呻いていた。

「ははっ、俺の勝ちだな、魔法のオクヤマさん。すまなかつたな、本気で入っちゃったかな」

土俵に倒れたミユリを上から見下ろし、ハルヤマは得意気にそう呼びかける。

ミユリは苦しそうに呻きながら、肩で息をし、かろうじて「私……私の負け……」とだけつぶやいた。

「負けを認めたってことは、いいのかな。約束だからね」

ハルヤマは苦しそうに横たわるミユリのスカートの裾をつまみ、それをひよい、とめくり上げる。長めのスカートの下から、戦いの最中には見えることのなかった、ミユリの白いパンツと、それに包まれた下半身のやわらかな曲線が現れた。

ミユリは抵抗しない。恨めしそうにハルヤマを見上げながら、相変わらず苦しそうに肩で息をしている。やがてミユリが目を閉じ、ハルヤマはそれを承諾の合図だと解釈した。

「はははっ、これが戦いの報酬ってわけだ。勝者が敗者から奪う。命をかけて勝ち取ったもの

「なんだから、もらう資格はあるよな」

ハルヤマは土俵の上にしゃがみこみ、目を閉じて動かないミユリの身体に手を伸ばす。肩、背中、腰、と撫でていき、自然とハルヤマの右手はミユリのお尻の辺りで止まる。左手をミユリの首に回し、抱きかかえるような姿勢になると、ハルヤマは右手でミユリのお尻を、パンツの上から撫でまわし始めた。

抜群のスタイルとDカップの豊かな乳房を持つミユリだが、やはりその一番の魅力は、ぷるんと上向きに付いた形の良い大きな尻だ。一説には学園の男子生徒の九割が目で追ったことがあるという伝説的な尻の持ち主であるミユリ。男が最初に手を伸ばしてくる場所は、最初から決まっていた。

「ようし、ようし」

ハルヤマは優しく、しかしいやらしく、コットンの上からミユリの尻をねちっこく撫で回す。するとやがてミユリの口から漏れていた苦悶の呻きは、何かを訴えかけるような甘えた声へと変わっていく。

その可愛らしさに興奮を覚えたハルヤマがミユリの顔を覗き込むと、ミユリが再び目を開い

た。

その目は、さきほどまでの冷淡な魔女のものではなく、潤んだ、媚びを含んだ視線へと変わっていた。

その濡れた視線がハルヤマの視線と絡み合い、数秒の間見つめ合った後、ハルヤマはミユリの唇に自分の唇を重ねる。その瞬間、ハルヤマとミユリの関係は、騎士と魔女ではなく、男と女へと変わった。

ミユリに仲の良い評判の彼氏がしようと、もう関係がない。スポットライトのような照明に照らされた土俵の上で二人きり。ハルヤマとミユリは一心不乱に唇を動かし、舌を絡め合い、戦いの果てにひとつとなった男女の運命に身を任せている。勝者も敗者も、剣も魔法も、また彼氏も彼女ももうそこにはなく、ただあるのは、一組の男女が愛し合い、セックスをして結ばれるという肉体的な運命だけだ。

土俵の上で抱き合い、絡み合う一組の男女を覗き見ながら、タチバナは途方も無い衝撃を感じていた。

一年前、四人の男達に無理矢理に処女を奪われ、弄ばれたミユリが、こうして再び、見知らぬ男のものになっている。

あの辛い事件を乗り越え、お互いを許し合い、仲直りしたはずなのに、そのミユリが、こうして再び他の男と、してはならないはずの行為をしてしまっている。

自分がいまだにミユリに一度もしていない、男女の肉体の行為を……昨日まで名前も知らなかったような男を相手に……

男と女となった二人はもう止まることなく、ミユリは自らブレザーを脱ぎ捨て、その下から現れたブラウスのボタンを、ハルヤマが器用に外していく。ミユリがブラウスの袖から腕を抜き、次の瞬間にはハルヤマがブラジャーのホックを外してしまうと、あつという間にミユリは上半身裸になってしまった。

「外すよ」

「うん」

そんな会話が囁き声で交わされ、ハルヤマの手はミユリのスカートのホックを外し、そしてスカートが足から引き抜かれる。

ミユリの白く長い足と、唯一残った衣服である白いパンツが、扉から覗き込んでいるタチバナの目にもまぶしく飛び込んでくる。

そしてハルヤマが土俵の上にミユリを仰向けに押し倒し、ミユリの白く豊かなDカップの胸

を音をたててしやぶり始めると、その光景だけでもうタチバナは圧倒され、握りしめた右手の中で、あつという間に限界に達して一発目のオナニー射精を遂げてしまった。

「くうっ、くううう……」

異常なほどの興奮を感じている自分が、タチバナは歯がゆくて仕方ない。

これほど勢いのいい射精をしたのは、あの雷雨の夜以来だ。

自慰行為に耽るミユリの姿はきれいだけれど、やはり男と女が絡み合う本物のセックスの迫力には敵わない。

男に弄ばれるミユリのエロティックな姿が見られることに、自分は興奮し、心のどこかで喜びを感じてしまっているのだ。

ハルヤマが自らもシャツを脱ぎ捨てて上半身裸になり、土俵の上ではミユリとハルヤマが互いに半裸で抱き合っている。

大きく逞しく、均整の取れた肉体を持つハルヤマと、抜群のスタイルを誇るミユリが抱き合う姿は壮観だ。まるで古代の美術品や、神話を題材とした絵画でも見ているかのような気分になってくる。

ミユリの身体を思うさま愛撫しながら、ハルヤマは自分が実力で勝利を手にしたと思つているに違いない。

だが、覗き見ていたタチバナには明白だった。ミユリはわざと魔法の攻撃を外し、わざと相手の攻撃を受けて、自分で意図して戦いに負けたのだ。

つまりミユリは、わざと戦いに負け、相手に抱かれるのが目的で、このハルヤマという騎士学部の男をこの場に呼んだのだ。

ハルヤマと抱き合い、全身を撫でまわされながら、男の肩越しにふとミユリが視線をやると、闘技場の入口、扉の隙間からタチバナが覗き込んでいるのがわかった。恋人同士である二人の視線が、扉越しに一瞬、絡み合い、タチバナは慌てて扉から目を離す。

（タツちゃん……やつぱり見てるのね……ごめんなさい……本当にごめんなさい……）

けれども、タチバナに済まないと思うほど、なぜだかミユリの興奮は増してきて、自分の胸や股間をまさぐるハルヤマの愛撫に声を出して反応してしまう。

そして、ミユリにとつての羞恥と屈辱の時間がやってきた。

ハルヤマがミユリを土俵の上に四つん這いの姿勢にさせたのだ。

「オクヤマさん、四つん這いになつてもらえるかな。敗者は勝者に絶対服従だろ」

ミユリはハルヤマと視線を合わせぬまま、恥ずかしそうに、嫌々といった様子で、四つん這いの姿勢を取る。

「そうだ。もつとだ。もつとお尻を突き出すようにして」

ハルヤマの言葉に、ミユリは屈辱を感じながらも、言われるままに背筋を反らせ、白いパンツに包まれたお尻をぐつと上に突き出す。

「ははっ、いい眺めだ。まさに雌犬だね。学園一と言われた魔法使いでも、俺みたいな優秀な騎士の前には、こうなるのが現実なんだね」

得意になつたハルヤマは四つん這いのミユリをしげしげと眺め、何も出来ないミユリを嘲笑

うようにパンツに手をかけると、そのままがぼつと引き摺り下ろした。

突き出されたお尻と、パンツの下に隠れていたものがすべて丸見えとなり、ミユリは自分のお尻の穴から、股間に濃いめに生え揃った毛、そしてすでに濡れそぼって半分口を開いたオマ○コまで、ハルヤマの前に晒してしまう。

「うわあ、エッチだなあ。これが学園一の魔女のオマ○コかあ」

ハルヤマがいやらしく笑い、丸出しになったミユリの股間をしげしげと眺める。

悔しさと恥ずかしさでミユリは「ぐううつ」と呻き声を漏らす、次の瞬間ハルヤマの手のひらが宙を舞い、ミユリは「きゃんっ！」という鳴き声を発した。

「ははっ、実は俺も、ずっとこうしたいって思ってたんだ。キャンパスで何度か君のことを見かけてから……この大きな尻を、思う存分ひっぱたいてみたい、ってね」

ハルヤマの手のひらが再び宙を舞い、ぱちんという音を立ててミユリのお尻に当たる。

「あああんっ！」という、濡れた声がミユリの口から漏れ、ハルヤマがおや、という顔になる。

「あれえ、オクヤマさん、ひよつとしてお尻が弱点なのかな？」

ハルヤマがミユリの尻をぱちん、ぱちんと叩く度、ミユリは「きゃんっ！ あんっ！」と、まるで子犬のような鳴き声を漏らす。されるがままとなり、か細い声を上げ続けるその様子は、先程の冷徹で怖い魔女のイメージからは想像も出来ない姿だ。

「ねえ、答えてよ。お尻を責められるの、好きなんだろう？」

ミユリの裸の尻に手を添えたまま、ハルヤマはそう問いかけながら、ミユリの顔を覗き込む。四つん這いの姿勢のまま、上目遣いにハルヤマを見つめて、ミユリの目は涙で潤んでいる。もう言葉は出で来ず、ミユリは泣きそうな顔で頷くのが精一杯だ。

「はは、やつぱりそうだ。こんなにエロい尻をして、男に触られまくっているうちに、感じやすくなったんだろ？」

ミユリはハルヤマの言葉がわからない。リュウトたち四人に最初に抱かれた時から、ミユリはお尻を責められて感じてしまった。お尻が弱いのは生まれつきなのかもしれない。なのに私

は、こんなに大きなお尻を持って生まれてしまった……

「じゃあ、今夜は俺がいつぱい責めてやるから」

ハルヤマの大きな手がミユリの尻を這い回り、激しくまさぐられると、ミユリは背筋に快感が走り、わけがわからなくなつて、四つん這いの姿勢を維持できず、「ああっ」と声を上げて土俵にうつ伏せに崩れ落ちてしまった。

「はははっ、本当にお尻が弱いんだね、オクヤマさん。でも倒れるのはまだ早いよ。俺は雌犬のポーズをした君に入りたいんだからさあ」

ハルヤマはうつ伏せに倒れ込んだミユリを抱え起こし、もう一度四つん這いの姿勢を取らせると、かちやかちやとベルトを外して学園服のズボンを脱ぎ、下着も脱いで全裸になった。

その露出した下半身を、四つん這いの姿勢のまま振り向いて見たミユリははっとして目を見張った。

二十センチを越えそうなほどの長さを持ったハルヤマのそれは、あのリュウトにも勝るとも劣らないほどの巨大な男根だったからだ。

仁王立ちになった全裸のハルヤマと、その股間に同様に仁王立ちしている見事な男根は、扉の隙間から覗き見ているタチバナにもはつきりと見て取れた。

(くっ……騎士とか戦士とかいう連中は、なんでみんなあんなにでっかいモノをしてるんだ……遅しい体に加えて、あんなモノを持っていたら、そりやきつとモテるだろう……けれどそんな奴のチ○ポが、その辺の女だけならともかく、僕のミュちゃんの中にまで入ってしまうなんて……!!)

世の中は不公平だ。タチバナはそう思いつつ、右手をぎゅつと握り、自分の粗末な十センチほどのチ○ポを握りしめる。

隙間から覗き見るタチバナの目の中に、全裸になったハルヤマが膝を着き、腰を降ろして、四つん這いになったミュリのお尻に入れようとしている姿が映る。

やがて狙いを定めたハルヤマは中腰のままミュリのお尻を抱え、自分の腰を前へ前へと進めていった。

「あっ……いやっ……ああああああっっ!!」

悲鳴のようなミユリの大声が第三闘技場に響き渡り、扉の隙間からは、土俵の上に四つん這いになったミユリと、そのミユリのお尻を抱えて、腰をゆっさゆっさと前後に動かしているハルヤマの姿が見える。

ミユリの膝には、ずり下ろされた白いコツトンのパンツがくしゃくしゃになって残っているが、後はほぼ全裸で、それを犯すハルヤマもとづくに全裸だ。

動物のような姿で交わる二人。先程ハルヤマが言った通り、ミユリの姿は雌犬以外のなにものでもない。

裸になり、四つん這いであられもない声を上げるミユリを見つめながら、タチバナの思考は次第に混乱に陥っていく。

交尾……これは交尾だ。

ミユちゃんは雌犬で、そのミユちゃんが、発情期の野良犬みたいに、たまたま野原で出会った雄犬と交尾をしている……それを僕は見ている……

ミユちゃんは喜んで……交尾は気持ちがいいから……

犬が交尾するのは、子供を作るため……

ああ、ダメだ、ミユちゃんとのこの男の子供が出来てしまう……ミユちゃんの中に、この男と

ミユちゃんが結ばれて出来た子供が出来てしまう……!!

タチバナはもう訳がわからなくなり、興奮と嫉妬と悲しみが混じり合つて、笑つていても泣いているとも判別できない表情に顔が歪んでいく。

頭の中には非常事態のアラートが全開となつて鳴り響き、涙で眼鏡が曇り、鼻水でぐしゃぐしゃになりながらも、目はミユリとハルヤマが繋がっている下半身の一点に釘付けとなり、自分の股間のモノをしごく右手の動きが止まらない。

僕の……僕の大切なミユちゃんなのに……僕の大切な、幼馴染の……子供の頃からずっと一緒だったミユちゃんなのに……それなのに……他の男の子供を妊娠してしまう……

絶望。失恋。かけがえのない相手を失う悲しみ。その絶望は闇となつてタチバナの心に広がり、やがて彼の存在のすべてを覆い尽くしていく。

(でもきれいだ、ミユちゃん。やっぱり僕はミユちゃんのことを好きだ……)

その瞬間、痺れるような快感とともにタチバナは右手の中で達し、扉の隙間から行為を覗く

タチバナは、その鉄製の扉の上に、この夜二度目となるオナニー射精を勢よく噴射した。

闘技場の中には、後ろからハルヤマに突きまくられるミユリの必死の喘ぎ声が響き続けている。

「はっ、はっ、すごいな。すごい身体をしてるんだな、オクヤマさん。ケツだけじゃない。胸も最高だ。入れながら揉むのがたまらない……オマ○コがきゅつと締まって最高だよ」

四つん這いの姿勢での挿入を楽しんだハルヤマは、今度は土俵の上にミユリを仰向けに寝かせ、正体位でのセックスに切り替える。

「でもやっぱり愛し合うには、抱き合ってるのが一番だよな。なあオクヤマさん……いや、ミユリちゃん……もう俺達、他人じゃないよね。彼氏がいても、俺は構わないよ」

仰向けになったミユリに覆い被さり、あらためて慈しむように、その豊かな乳房をべろんべろんと舐め回しながら、ハルヤマはミユリにそう呼びかける。

当の彼氏が、その様子を覗き見ているとは夢にも思っていない。けれど、その彼氏であるタチバナの目から見ても、今この瞬間、ミユリが女としてハルヤマのものになっていることを認めざるを得ない。

ハルヤマはまた、ほんの半年ほど前、ミユリがこの第三闘技場で、今とまったく同じようにして、彼の一年先輩である四人の男子学生達に抱かれていたことを知らない。また知っていたとしても、きつと気にしなかつただろう。

魔導士課程の院生ではあるが、自分たちからすれば歳下で、学園内でも美人と名高い評判の女の子。半年前にはリュウトとの噂が流れたが、プレイボーイ揃いの騎士学部にはそんな話は溢れていて、いちいち気にする者はいない。

男にとって大事なのは、今この瞬間、やれるかどうか。そして出来れば、明日以降もやれるかどうか。

だからこそハルヤマは、奇妙な成り行きでモノにしたこの美少女に対しても、その関係を維持しようと、口説き落とすための言葉を忘れなかつた。

「なあ、ミユリちゃん、俺のこと好きって言ってくれよ。これも運命だよ。きつかけは戦いでござ。俺は、ちゃんと気持ちを含めて愛し合いたいんだよ」

膝に残っていたパンツも足首から抜いて、すっかり全裸になったミユリを上から見下ろしつつ、ハルヤマはミユリにそう問いかける。ハルヤマの顔はだんだんミユリに近づいてきて、ほんの十センチを隔てて、男と女が見つめ合う。

「好き……好きよ、ハルヤマくん……」

潤んだ瞳のまま、恥ずかしそうに、けれどまつすぐにハルヤマを見つめて、ミユリはそっとそう囁く。

その言葉に満足したハルヤマはミユリを抱き締めてキスをし、土俵の上には全裸の男女が絡み合うなまめかしい光景が展開される。

抱き合ううちに自然にミユリの両足が開いて、ハルヤマの胴体を挟み込む形になる。ハルヤマは軽く上体を起こすと、そのまま片手で股間の立派なモノをつまんでミユリの股間にあてがい、難なくミユリの中に侵入した。

「あああああああああつっつ!!」

ミユリがのけぞり、闘技場の中にふたたび女の喜びの声が響き渡る。

半年前、リュウトら四人の男達にさんざんに弄ばれ、ミユリは深く傷付いた。

けれどもその弄ばれた快感は、身体に刻まれてしまっている。その快感と、被虐的な敗北感が忘れられなくて、ミユリは自慰行為を繰り返していた。

けれど、思い出すだけではやはり物足りない。

今、ミユリはハルヤマという逞しい騎士に敗北し、彼の前に裸を晒し、女としてすべてを奪われている。そして今、ハルヤマのリュウトにも勝るとも劣らないほどの巨根が、ミユリを犯している。

その事実には、ミユリの身体は震えるような快感に包まれ、喜びの声を上げずにはいられない。ミユリにとってみれば、これは自分の中にずっと秘めていた願望の実現なのだ。

先程まで生死を賭けた戦いの場だった闘技場の土俵は、今や男女の愛の行為の舞台となっていた。

大声を上げて感じるミユリに、得意となったハルヤマはさらに激しく腰を動かし続ける。

その腰の激しい動きに連れて、ミユリの豊かな胸もぷるん、ぷるんと大きく揺れる。それを見たハルヤマがさらに興奮し、怒張したペニスで突かれるミユリはさらに大きな声を上げ、男女の間の快感のスパイラルはとめどなく上昇を続けていく。

裸で乱れるミユリの姿に愛しさを覚えたハルヤマはひとつになつたままミユリを抱き締めキスし、ミユリはキスに応えながら必死でハルヤマの背中に腕を回してしがみつく。抱き合っているうちに自然と男女が上下逆となり、ミユリはハルヤマの逞しい腹筋の上で、髪を振り乱し、胸をゆさゆさと揺らしながら腰を前後させる。

その息のあつた男女の動きは、昨日まで見知らぬ同士だったとはとても思えない。

「あんっ、あんっ、ああああんっ!!」

夢中になつて腰を動かす、誰憚ることなく甘い声を上げるミユリの様子に、彼氏であるタチバナから見ても、ミユリとハルヤマの身体の相性が良いことがわかる。

(僕はまだミュちゃんど、この十分の一もエッチなことをしたことが無いのに……)

それなのにミユリは、自分とは比べ物にならない逞しい巨根男と、こんなにもエロティックで激しいセックスをしてしまっている。

（たぶん僕はミュちゃん、こんなに激しいエッチは出来ない……きつと、一生……）

タチバナの中に嫉妬と悔しさが湧き起こり、それと同時に、もつともつとミュリの乱れる姿が見たいという裏腹の感情がじわじわと高まっていく。

「……マキシマム・ヒール」

無意識のうちにタチバナは呪文を詠唱し、最大の回復力を持つその治癒魔法を、土俵の上でスポットライトを浴びて抱き合う一組の男女に向けて放っていた。

「あああああああーっっ!!」

「う、うおおおおおっ!!」

次の瞬間、見えない光に包まれた男女は身悶え、ミュリだけでなく、ハルヤマも、驚いたように切羽詰まった叫び声を上げた。

「な、何だ、これは……急に熱くなつた……き、気持ちいい……快感が増していくぞ……！」

先程までとは違う強烈な快感を感じたハルヤマが慌てた声を出す。

セックスの快感とは、生命力の快感だ。

男と女の命がぶつかり合う、その生命力のほとばしりこそが、セックスの快感の源なのだ。

今、そこにタチバナの放つた回復魔法により、さらなる生命力が注がれ、男女の身体は共に活性化し、普通では考えられない快感が生まれていた。

「ううんっ、うううんっ、はあうううんっ!!」

回復魔法によつて全身に広がつた爽やかな快感に、ミユリは何も考えられなくなり、絶えず裏返つた声を漏らしながらハルヤマの上でくねくねと腰を動かしている。

「あつ、やめろっ、や、やばい……!!」

突如として襲つてきた異常な快感に恐怖を感じたハルヤマはミユリの身体にすがりつくようにして抱き付き、その動きを止めようとする。けれども強烈な快感には逆らえず、自分もミユ

リの中から抜くことは出来ずに、結局そのままミユリを押し倒し、再び正体位でミユリを貫く形となった。

「き、気持ちいい……あたたかい……ぬめぬめと……ぬるぬると絡み付いてくる……それに、爽やかだ、全身が爽やかになっていく。な、何だ、なんていい身体をしてるんだ、君は……!」

やがてハルヤマの顔が快感にだらしなく歪んでいき、足を広げたミユリの上で、ハルヤマの腰がカクン、カクンと規則的に動き続ける。その動きがもう止められないことは、貫かれているミユリにも、犯しているハルヤマにも、それを覗き見ているタチバナにもはっきりとわかった。

「うおお、うおおおお……だ、ダメだああああああああ!!」

叫びながらハルヤマが絶頂に達し、それと同時にミユリが「あああああ!」という甲高い悲鳴を上げる。

土俵の上、男女の肉体がひとつになった部分、そのミユリの下半身の中で、ハルヤマの大きな男根は脈打ち、その先端から多量の精液がしぶきを上げるようにしてどぼどぼと噴出する。

ミユリを抱きかかえながら、ハルヤマの腰はびくびくと痙攣し、精液を注ぎ込む音が外からも聞こえてくるようだ。ミユリの身体の上、必死になって射精しているハルヤマの尻の下、ポンプのように収縮を繰り返し、精液を送り出している睾丸の動きを、度の強い眼鏡越しに見つめつつ、傍観者に過ぎないタチバナもまた興奮が限界に達して、この夜三度目となるオナニー射精を、握りしめた右手の中で噴出させていた。

短時間のうちに三度目の射精であるにもかかわらず、タチバナの短いペニスからは精液が勢い良くびゅつと飛び、覗き見ている闘技場の鉄の扉に音を立てて付着した。

けれども今、ミユリの下半身の中では、それよりもはるかに強い勢いで、何倍もの多量の精液が、ハルヤマの極太のチ○ポから噴射され、ミユリの子宮の中に注ぎ込まれている。

男女がひとつとなった快感とあたたかさの中で、ミユリという美女の子宮の中、新しい命を生むために泳ぎ回るハルヤマの精子と、鉄の扉に付着したまま、女の肌に触れることすらなく、だらりと垂れて干涸びていくタチバナの精子。その両者の間には、まさに勝者と敗者、奪う者と奪われる者との違いがあった。

「はあつ、はああつ、くつ……」

大きなため息をつき、肩で息をしながら、射精を遂げたハルヤマはやつとの思いでミユリの中から自分のチ○ポを引き抜いた。

射精を済ませ、幾分冷静になったハルヤマは快感に圧倒されながらも、苦々しい表情だ。

ミユリを妊娠させて後々問題とならないよう、膣外射精で済ませるつもりだったのに、突如として襲ってきた快感に何も考えられなくなり、ミユリとひとつになったままで最後まで遂げてしまったのだ。しかも、大量に。

土俵の上に横たわり、だらしなく足を開いたままのミユリの股間からは、自分が出した白い精液が後から後から流れ出てきて、水たまりを作ってしまったている。何人もの恋人達とセックスをしているハルヤマだが、こんなに大量の射精をした経験は今までにはない。

(こ、これ、本当に俺が出したのか……?)

横たわったミユリは目を閉じたまま、頬を紅潮させ、口を小さく開けたまま、絶頂の余韻に浸るように色っぽい吐息を漏らし続けている。射精を終えた瞬間に冷静になる男と違い、ミユリは夢の中を漂うようにして未だに快感の中にいる。一人の魔法使いとして騎士に戦いを挑ん

で敗れ、女としてのすべてを奪われたというのに、その表情はどこか満足げだ。

(か、勝ったんだよな、俺……)

突然に挑まれた戦いと、運良く自分のものになった最高の女とのセックスだったが、最後に襲ってきた異常とも言える快感と、それに押し流されて中に遂げてしまった後ろめたさが、ハルヤマを混乱させていた。

「お、俺は悪くないからな……オクヤマさん……君が言ったんだ、好きにしていって……」

吐き捨てるようにそう言うと、ハルヤマはいそいそと服を着始め、そして裸で横たわるミユリをそのままにして闘技場を出て行った。入口のところにはタチバナが慌てて建物の裏側へ隠れようとして転び、派手な音を立てたが、ハルヤマにはそれに気付く余裕はなかった。

こうして、ミユリとタチバナの秘密の自慰行為は、いつしか二人だけのものではなく、他の男達を交えたものになっていったのだ。

ハルヤマとミユリのリターンマッチは、一ヶ月を経ずして行われ、ミユリの魔法が何度放つても当たらないのを見ると、ハルヤマも次第にミユリの意図に気付き、三度目の対戦にはやにやしなから余裕しやくしやくで現れるようになった。

ミユリが挑戦状を突き付け、対戦を要求した相手はハルヤマだけではなく、騎士学部の腕に覚えのある男子学生は順番に夜の闘技場に呼び出されることになった。

夜更けになり、騎士学部の男子寮の部屋窓に、突如として「私と戦え」と火文字が浮かび上がると、それがミユリからの挑戦状だった。

だがそれらの騎士学部の男子学生達の間には、すでにミユリについての情報が共有されており、彼女に負けた者が誰もいないこと、彼女の放つ魔法はこけ脅しで決して当たらないこと、そして尻が弱点で、尻をぼん、と一発叩けばゲームオーバーとなってミユリは動けなくなることも、ターゲットとなる騎士達の間で知れ渡っていた。

ミユリはクイックフットの魔法で素早く逃げ回るが、粘り強く追いつがつて尻に触れることが出来れば、ミユリは力が抜けるようにして土俵に崩れ落ち、後は男達のなすがままになる……

こうしてミュリは戦いに負け続け、何人もの騎士志望の学生達によって、その美しい身体を「好きなように」されてしまった。

ミュリからの「ご指名」の火文字が窓に現れると男達は盛り上がり、中には何人かで連れ立って夜の闘技場へ向かう者たちも居た。その後、第三闘技場の中で展開されるのは、一人の美少女が何人もの男達によって好き放題にまわされる光景だ。そんな時、ミュリは決まって「卑怯だわ、何人も連れてくるなんて」と怒り出すが、本当は嬉しがつており、戦いの後、まだろくに愛撫もしないうちからぐしょ濡れだったという話が、いやらしい噂となつて騎士学部の男子生徒の間に広まっていた。

こうして、幼馴染の恋人であるタチバナと何年もプラトニックな純愛を貫いてきたミュリは、リュウトたち四人の男、そして師匠のクジマと身体を重ねただけでなく、騎士学部の複数の男子生徒と肉体関係になり、ミュリの男性経験人数は、あつという間に二桁となり、1ダースとなり、そして気が付けば二十人を越えてしまっていた。まだ大切な恋人であるタチバナを、一度もその股間に迎え入れていないにも関わらず。

当の彼氏であるタチバナはといえば、それらのミュリと騎士たちとの決闘を、一回も欠かさ

ずに観戦していた。それはもちろん、戦いの様子だけではなく、それらの戦いにミユリが敗れ、男達のなすがままにされてしまう様子まで、最後まで一瞬たりとも見逃さずに見つめ続けたのだ。

やがて土俵脇にあるロツカーの中が、タチバナの特別な観覧席になった。武具をしまっておく大きなロツカーの中に入り、その換気用に開いた隙間から外を覗くのだ。入口の扉から覗くよりも、近くではつきりと、ミユリが脱がされていく様子が見れるし、周囲からも気付かれず、また、オナニーもしやすかったからだ。

決闘のある夜には、タチバナの部屋の窓にも「私を見て」という火文字が現れた。

だが、次第にそれすらも必要がなくなった。

ミユリが闘技場で男達と会う日には、ミユリは昼間からどこかそわそわしていて、態度がよそよそしくなるからだ。

そして、授業後のデートの後、「決闘」をする日にはミユリは決まって、少し恥ずかしそうに、別れ際、タチバナの首筋にそつとキスをした。

この日、一年近くにわたる魔導士課程の厳しい修行を経て、ファイヤー・ドラゴンという最大級のモンスターを撃破し、卒業試験の合格を決めた夜。

そんな時、勝利を祝っている中で、ミユリが別れ際にその「決闘」を意味する首筋へのキスをしたから、タチバナは当惑し、信じられない思いで、しばらくその場を動けずにいた。

けれどもそれから三時間後、いつものように、暗い闘技場の中でタチバナがロツカーの中に入り、息を殺して待っていると、果たしてミユリがそこにやってきた。

闘技場の照明が点灯し、スポットライトのような光で照らされた土俵にミユリが上がる。その姿は、さきほどの試験の時と同じ制服姿だ。スカートは焼けこげて膝上までの長さになり、破れてしまったブレザーも脱ぎ捨てて、上半身はブラウスだけになっている。

やがて、闘技場の外に人の気配がしたかと思うと、鉄の扉を開き、男達が入ってきた。

やってきたのは、ハルヤマと、その取り巻きの男が三人。

始めは自分一人でミユリを抱いていたハルヤマも、責任を負いたくないためか、あるいは楽しみは共有しようという男の連帯意識なのか、次第に仲間を連れ立ってやって来るようになっていた。

西側に立つミユリに対して、四人の男達は土俵の東側に立って向かい合う。

「男というのは群れたがるものね。どうして一対一で来ないの。卑怯だと思わないの？」

「どうして、って、そりや、その方がミユリちゃんが好きからに決まってるじゃないか。もうみんな知ってるぜ。君が本当は男にやられたがっている、変態女だって」

ハルヤマは三人の取り巻き達と一緒に、ニヤニヤしながら見下したようにミユリを見つめている。

「本当はオレ達の姿を見て、喜んでるんじゃないか。こうして皆で来てやったんだ。チ○ポが多ければ多いほど、嬉しいんだろ？」

ハルヤマの取り巻きの中、坊主頭をした男が、そう言っただけでひひひと笑う。彼ももう二、三度は、この夜の闘技場にやって来たことがある。それはつまり、ミユリのオマ○コにも何度も入ったことがある『常連』だということだ。

ミユリが冷淡な態度で啖呵を切つても、もう男達には通じない。

そもそも彼らはこれまでに何度もミユリを抱いている。自分の身体の下で、裸になって可愛い声で喘いでいた女を、今更怖がる男は居ない。

「くっ……」

たとえ何度勝負に敗れようと、魔法使いであるミユリにはプライドがあつた。そのプライドがこうしてまた、踏みにじられる。

「さあ、またいつものように、鬼ごっこを始めようぜ」

「今日はどんな花火を見せてくれるのかな」

男達はミユリの魔法が自分達に決して当たらないことを知っているから、余裕しやくしやくな態度で、左右から、正面から、ミユリを囲むようにしてにじり寄る。

「言つてなさい。焼き殺してやる」

ミユリは両手を上に掲げ、炎の魔法を発動するが、次の瞬間、ばちばち、と音がしたかと思ふと線香花火のような火花が二、三度現れ、そして「ぼん」という音とともに消えて、煙だけが残った。

「あつ……!?!」

「どうした？ 不発かい？」

明らかに失敗とわかる魔法を放ち、慌てた表情を見せるミユリに、男達が嘲笑いながら、さらにもう一歩ずつにじり寄る。

「こんなはずじゃ……」

ミユリはもう自分がわからなくなっていた。

確かに始めのうちは、意図して狙いを外して魔法を放っていた。

けれど、何度も男達と向き合い、敗れて抱かれるうちに、本当に当てようとしても魔法が当たらなくなってきた。

男と向き合うと、自分がダメな魔法使いになったような気がする。

自分の身体を求めて来る、いやらしい目をした男達には、自分の魔法は永久に当たらないんじゃないかと思えてくる。

「えいっ!!」

ミユリは気合いを込めて、もう一度両手を掲げ、炎の魔法を発動する。

炎の魔法は、ミユリが最も得意とする魔法。その熱く燃える火は、攻撃性を秘めたミユリの心そのものだ。

炎を扱うことに関しては、他のどんな魔法使いにも負けないという自負がミユリにはある。

だが掲げた両手から炎は吹き出すことはなく、「ぶすつ」という間の抜けた音がしたかと思うと、ミユリの頭上には黒い煙だけが立ち上る。

「そ、そんな……」

炎が言うことを聞かない。ミユリの心そのものである炎。その炎が今、ミユリの思いとは裏腹に、ミユリを裏切っている。

「どうしたんだい、花火はタネ切れかな？」

「アソコが濡れ過ぎて、魔法も湿っちまったんじゃないのかよ？」

ハルヤマたち四人の男達はくすくすと笑いながら、さらにもう一步、ミユリに近づいて来る。もう手を伸ばせば、彼らに捕まってしまうそうだ。

「し、死ねっ!!」

ミユリはハルヤマに向かって右手をかざすと、渾身の力を込めて魔法を発動する。この男が憎い。殺してやる。本気でそう思っていた。

しかしミユリの指先から発現したのは、ほんの小さなマッチの火のような小さな炎だけ……

「今日は手品の調子が悪いみたいだな、ミユリちゃん」

ハルヤマがそう言って笑い、ミユリの顔を覗き込む。

憎い。この男が憎い。

魔法を失敗したショックと、自分の不甲斐ない無力感に、敗北を悟ったミユリは俯き、その小さな肩がわなわなと震え出した。

「はい、試合終了」

ハルヤマの左側に立っていた坊主頭の男が、左手を伸ばして手のひらでミユリのお尻をぽんと叩く。『試練の間』での戦いで膝上まで焼け焦げたスカートに男の手が触れ、坊主頭の男はその短いスカートの上からミユリの尻を遠慮なく撫で回す。

弱点に触れたミユリは「んっ」というため息を一瞬、漏らし、尻を撫でられるのに連れてミユリの全身から魔力が抜けていく。指先に灯ったマツチのような小さな炎がしぼんでいき、ふつと消えて一本の白い煙だけが残る。身動きすることも出来ず、いつしかミユリは涙を流していた。

「じゃあ、今夜もお楽しみの時間といこうか、ミユリちゃん」

ミユリの魔力が消えたのを確認した四人の男達は、それぞれに手を伸ばし、ミユリを取り囲むと、ミユリの太ももを、尻を、胸を、そして股間を、遠慮なくさわり始める。

敗北を認めたミユリは目を閉じ、先程あれほど憎いと思っていたハルヤマのキスを無抵抗で受け入れ、自分から舌を動かしてハルヤマと舌を絡め合っていた。ミユリが再び目を開くと、そこにはもう憎悪は無く、濡れた瞳で上目遣いにハルヤマを見つめる一人の可愛い女が居るだけだ。

「ははっ、涙なんか流して、ミユリちゃん、今日は何か嫌なことがあったのかな。今夜はいっぱい可愛がつてやるから、安心しなよ」

ハルヤマは得意気にそう言ってミユリの頭を撫で、ミユリの顔を見つめてはキスを繰り返す。この半年の間、学園随一の美少女であるミユリは、このようにして騎士学部の男子生徒たちにさんざん可愛がられ、誰もが恐れる怖い魔女ではなく、誰でもやれる女として、彼らの共通の

情婦となってきたのだ。

もはや和気藹々とした雰囲気の中、笑いながらミユリを脱がせていく四人の男達に、ミユリは黙って従い、手を上げてブラウスの袖から腕を抜き、肌着も自ら脱いで、そしてブラジャーのホックに誰かの手がかかったかと思うと、パンツもさつと引き降ろされて、あつという間にミユリは全裸にされてしまった。

まだ学生服を着ている四人の男達と、それに囲まれた全裸のミユリの対比はとてもエロティックだ。もう涙は止まったけれど、泣きはらした顔が赤く染り、ミユリのあどけない顔つきが強調されて愛らしい。

タチバナは、暗いロッカーの中から、ミユリが魔法の一発も放つことなく、男達の前に何の抵抗もできずに敗れ、泣きながら脱がされていく様子をじつと見守っていた。

（そうか、ミユちゃんが求めていたのは、この屈辱感なのか。今夜、ミユちゃんは、大きな勝利を手にした。学生の身でありながらファイヤー・ドラゴンに勝利するという、普通じゃ考えられないようなすごい勝利を手にして、クジマ先生の卒業試験を乗り越えた。だからこそミユ

ちゃんは、甘美な敗北と、これ以上無いほどの屈辱を欲して、今夜はそれに浸りたいと思つたに違いない。気持ちのいい勝利を手にしたからこそ、それ以上に気持ちいい敗北を、ミュちゃんに求めたんだ……)

ロツカーの隙間からは、土俵の上、全裸のミュリがハルヤマの前に跪き、彼に奉仕しているのが見える。ハルヤマのズボンのチャックは開かれ、そこから彼の大きな男根が突き出している。跪いたミュリはそのハルヤマのチ○ポを大事そうに両手で持ち、健気な様子でなめ回し、口に含んでいる。

やがてミュリはハルヤマのチ○ポを深々と口の中に入れていき、そのハルヤマの二十センチ級のチ○ポが根元の方までミュリの口の中に隠れてしまった。あの大きなチ○ポがどうやってミュリの喉の奥にまで入っているのか、覗き見ているタチバナにもさっぱりわからない。

「はははっ、可愛く見えても、やっぱり魔女だよなあ。このとんでもないフェラチオだもの」

ミュリがハルヤマに奉仕している間にも、坊主頭の男はミュリに手を伸ばし、後ろからミュリの胸をもみしだしている。ミュリのDカップの豊かな胸が、坊主頭の手によって揉みしだかれ、柔らかく形を変える様子が、土俵脇のロツカーから覗き見るタチバナにもはっきりとわか

った。

やがて坊主頭の男は、ハルヤマのチ○ポを口に入れたままのミユリを促して立たせ、自分に向けてお尻を突き出させる。坊主頭は嬉しそうな顔でズボンを降ろし、ハルヤマほどではないが立派な十八センチほどのチ○ポが現れる。

もう次に起こる事は決まっていた。前と後ろからの同時挿入。

ミユリは口の中にハルヤマのチ○ポを啜えたまま、オマ○コに坊主頭のモノを入れられるのだ。

「んっ……んんうーっっ!!」

男が入ってきた快感に、ミユリは声を上げるが、口が塞がっているため、それはくぐもった声となつて闘技場の中に響く。

全裸となり、何本もの手で胸を揉みしだかれながら、口にも、股間にも、男のモノを突っ込まれたミユリの姿は哀れとしか言いようがない。それは敗北した姿だからこそ哀れで、哀れだからこそ、乱されたその姿はエロティックだった。

（私、また……好きでもない男の人を受け入れてしまった。名前も知らない男の子たちと、こうしてセックスをして、オチ○チンを入れられてしまっている……ごめんなさい、シスター・クローバー。本当にすみません。去年、リュウトくんと深い関係になって、赤ちゃんが出来た時、シスターに助けってもらって、あんなにお世話になったのに……また私、いけない事をしてしまっている……女神様……女神様にも、優しい言葉をかけてもらったのに……）

坊主頭の男に犯されながら、ミュリの心の中は罪悪感でいっぱいになる。

けれども、罪悪感を感じれば感じるほど、なぜだか股間はきゅつと締まり、突き上げるチ○ポに快感が高まっていつてしまう。

都にある女神の神殿でシスター・クローバーの儀式を受け、『哀れみの女神』に出会った後、ミュリはこれからはタチバナだけを愛そうと決意していた。

けれども現実はこちらだ。気が付けばミュリは自分から望んで、何人もの男子学生と肉体関係になってしまっている。破廉恥なことだとわかっていても、自分でそれが止められない。

リュウトたち四人に抱かれた時は、無理矢理だったけれど、今は自分の方から男達を『決闘』に呼び出しているのだから、言い訳は出来ない。

自分がこんなに悪い女だったなんて……

女神の前で誓いを立て、いくら真つ直ぐに生きようとしても、現実にはそうすることの出来ない人間の弱さと、女の業の深さを、ミユリは思い知っていた。

ミユリは、『哀れみの女神』にどんな言葉をかけてもらったのか覚えていない。この世から離れた空間で、神聖な存在に出会った記憶は、時が経つにつれて日常の世界では曖昧になってしまうものだ。

だから自分がやがて英雄となると言われたことや、走馬灯のように見せられたすべての戦いも、生涯のうちにミユリが抱かれることになる数々の男達の顔も、ミユリは覚えていない。ただ、それらは深層の意識の中で、強い光となってミユリを導いていた。

ミユリが都で出会った神聖な存在に思いを馳せたのはほんの束の間。

目の前には殺伐とした戦いと、その戦いの果てに、男達の欲望によつて奪われる哀れな自分の女の肉体があるだけだ。

その男の欲望に満ちた下品な声が、ミユリを現実を引き戻す。

「おい、今夜もいっぱい中に出させてもらうぜ。魔女は妊娠しないんだろ？」

ミユリの尻を抱えて、一心不乱に腰を動かしながら、坊主頭の男がしゃがれた声でそう呼びかける。

「俺も聞いたぜ。黒魔術師の女は、人間とのセックスじゃ妊娠しないって。悪魔とセックスして、悪魔の子供を産むためらしいぜ」

ミユリの脇に立ち、ミユリの胸を揉みしだいていた背が低く筋肉質な男が、そう言つて噂を肯定する。

「なるほどな。どうりで、オレ達がやりまくつても妊娠しないわけだ」

坊主頭の男はひひひと笑い、一層激しくミユリの尻を突き上げた。悪魔の子供を産むなんて気が悪いが、そのおかげで自分達は欲望のままにやりたい放題中出しできるので都合がいい。

実際にはミユリがこれほど頻繁に騎士学部の男達を相手にして妊娠しないのは、クジマの魔法によって守られているからだった。

あの都で過ごした夜以来、クジマとミユリの関係は、師匠と弟子でありながら男と女のそれになった。

個人指導を旨とする魔導士課程の修行の中で、度々ミユリとクジマが男と女として肌を重ねてしまうのは、どちらかといえば無意識のうちにクジマを誘惑するミユリに原因があった。

クジマはもともと厳格な師匠であり、弟子のミユリに手を出す気など毛頭なかったが、あの都で過ごした一夜以来、クジマはミユリに対して、単なる弟子以上の感情を抱いてしまった。妻に先立たれて長いこともあり、孤独なクジマは男としての感情の弱い部分をミユリに驚かすために、いつしか魔力の面だけでなく、男と女の関係の面でもミユリはクジマと同等の立場になっていた。

だからこそクジマは女としてのミユリを拒めず、師匠でありながら拒めずると男と女の肉体的な関係が続けることになったが、それでも師匠である自分がミユリを妊娠させるわけにはいかない。

そのためクジマはミユリの身体に定期的に魔法をかけていた。

それは子宮に侵入してきた精子がたちどころに死滅する一種の攻撃魔法である。

女であるミユリは母性本能があるから、自分の子宮に自分で魔法をかけることは出来ない。だが師匠であり男であるクジマにはそれが出来る。

結果的にこの魔法が、何人もの男子学生達に抱かれながら、ミユリが妊娠してしまうことを防いでいたのだった。

「あつ、あつ、あつ、ああつ、ああああつ!!」

坊主頭の男に後ろから激しく突き上げられて、ミユリの性感は高まり、あられもない濡れた声を土俵の上に響かせてしまっている。

生唾を飲み込みながらロツカーの中でそれを見つめるタチバナも興奮し、その右手にはすでに自らの股間のモノがしつかりと握られている。

戦いに敗北したミユリが男達に蹂躪される様子を見つめながら、ロツカーの中で息を潜めるタチバナに出来ることは何もない。たとえここから出ていって男達に殴り掛かったとしても、自分には勝ち目の無いことは、リュウト達にボコボコにされた時に身に染みている。自分には攻撃魔法は使えないし、セックスを邪魔するための魔法は効果が無い。

何よりミユリが自ら望んでこれをやっている以上、自分に出来ることは黙ってヤキモチを焼

くことぐらいしかない。

タチバナの目の前で、これから起きる事は決まっている。

これから何時間もかけて、ミユリはこの四人の男達にやられまくり、中出しされまくり、そしてミユリは快感の声を上げ続けるのだ。

その間に自分は何度、握りしめた自分の右手の中で射精してしまうだろう。

あいつらがそれ以上の回数を、ミユちゃんの中で遂げてしまう間に……

(そして僕も、ミユちゃんがあいつらにやられまくる手助けをしてしまう……)

ミユリがこの男達との夜の決闘をやめられないように、タチバナもまた、ミユリが乱れる姿をもっと見たいという欲求に逆らえない。

「……マルチプル・ヒール」

タチバナが唱えた魔法は、ひとつになった男女の性感を高め、通常以上のセックスの快感と、大量の射精を促す。それだけでなく男達の体力を回復し、性欲を高め、果てしないセックスの

繰り返しを可能にして、とめどない欲望の宴を作り出すのだ。

回復魔法は女であるミユリの身体の負担を無くし、下半身を潤滑にして、包み込むようなあたたかさによって精神的にも安心感をもたらし、それによって男達ばかりでなく、ミユリも天にも昇るような快感を味わうこととなる。それが何時間も続くのだから、その快感の量は人間が味わうことの出来る感覚の限界をはるかに越える。男達はもとより、ミユリがこの闘技場での秘密のセックスを止められなくなるのも無理はなかった。ミユリが男達との寝取られセックスに夢中になる原因を作ったのは、半分はこのタチバナの魔法のせいだと言えた。

「んんーっ、んんうーっ!!」

魔法により性感の高まったミユリは、ハルヤマのチ○ポを啜えたまま、悲痛とも言える快感の声を漏らし、やがて「うおおおお！」という雄叫びと共に、坊主頭の男がこの夜最初の射精を行う。

時を同じくして、ロッカーの中のタチバナも最初のオナニー射精を遂げている。

だがまだこれはほんの始まりに過ぎない。

興奮したハルヤマと取り巻きの三人が、それぞれに目をギラつかせながらズボンを脱ぎ、その下半身のモノを露出させる。

そのいきり立つたチ○ポが、これから順番にミユリの中に入ることになる。
ミユリはこれから、腰が抜けるほど、この男達にやられるのだ……

ハルヤマたち四人の男とミユリとのセックスは過剰なほどに盛り上がり、一人あたり三度にはなるうかという射精を遂げて、男達が満足し帰っていった時には、もう時刻は明け方近くになつていた。

男達が去つた第三闘技場の中、土俵の上には、果てしのないセックスで汗ばみ、全身精液まみれになつた裸のミユリが、スポットライトに照らされて横たわっている。

タチバナはガシヤンという音とともにロッカーから出ると、土俵の上のミユリに向かつて静かに歩み寄る。

タチバナがミユリの手を握ると、横たわっていたミユリは驚いて目を開けた。
ミユリ同様、タチバナの手も、汗と精液でじつとりと湿っている。

「タツちゃん……」

手を握ったまま、ミユリはまっすぐにタチバナと見つめ合う。

この第三闘技場での秘密のオナニーと、男達相手の寝取られセックスを行っている間、これまで二人は互いに顔も合わせず、声もかけたことが無かった。昼間会っても決してそのことについて話さなかったけれど、お互いにそこにおいて相手を見ていることは知っていた。

互いのもつとも恥ずかしい部分を、認め合い、受け入れ合った二人。

お互いを理解し合っている相手に、余計な言葉は必要ない。

「タツちゃん……」

素顔のままの、少女らしい可愛らしい声で呼びかけるミユリに、タチバナは黙って頷き返す。

「……タツちゃん、私……変わりたいって思ってるの……こんな自分が、嫌でたまらないの……」

ミユリは泣いている。タチバナは横たわるミユリのそばにしゃがみこんで、手を握ったままミユリの話を聞いている。

「タツちゃん、聞いて……私、卒業したら……冒険者になりたいって思ってるの……馬鹿だと思われるかもしれないけれど……ずっと、そう思ってたの……タツちゃん、一緒に戦ってくれる……？」

タチバナはミユリの顔を見つめたまま、「うん」と声に出して頷いた。

「よかった……私、タツちゃんが一緒なら、戦える気がするから……」

ミユリはそう言つて、安心したようにそつと笑い、タチバナもそれに答えて、優しさと心配の入り交じった笑顔でミユリを見つめる。

「タツちゃん、私、もうひとつ、なりたいものがあるの……卒業したら……」

ミユリは涙で目を濡らしたまま、訴えるようにタチバナを見つめ、再び呼びかける。

「タツちゃんのお嫁さんに、なりたいの……なれるかな、私……？」

思いを打ち明けたミユリの表情が、一瞬、不安で曇る。

「なれるよ」

タチバナの言葉に、明かりが灯ったようにミユリはにつこりと笑い、そして二人はそつとキスを交わした。

同じ日、同じ場所で生まれ、幼馴染として共に育った二人。

その二人は十数年の後、共に優秀な魔法使いとなり、そしてついに二人は、互いの気持ちを確かめ合ってプロポーズを受け入れ、夫婦となる約束をした。

けれどもその時、ミユリは全裸で男にやられまくった後で、彼女の股間は、まったく関係のない四人の男の精液でぐちゃぐちゃになっていたのだった。

(体験版ここまで)

© 八ヶ岳昌司 2020年

ブログ 寝取られと純愛（現在休止中）
nrlove.com

表紙絵 ジュエルセイバーFREE

<http://www.jewel-s.jp>